

小林威雄先生追悼号によせて

小林威雄先生は本年（1993年）3月20日に、定年退職まで11日を残して、逝去されました。亡くなられる前日まで普段とお変わりなく、退職後の抱負を元気に語っておられた先生の本誌記念号を、「追悼号」としなければならなくなったことは誠に痛恨の極みです。

小林先生の歩みは、戦後の立教大学経済学部への歩みそのものでした。先生は1945年4月に立教工業理科専門学校に入学され、翌年立教大学予科2年に編入学され、1950年に旧制の立教大学最後の卒業生として経済学部を卒業されました。その後新設の立教大学大学院経済学研究科修士課程と博士課程の最初の入学者となり、また本学大学院が授与する最初の経済学博士号取得者となりました。そして経済学部副手、助手を経て1957年に専任講師となられて以降、36年の長きにわたって学部と大学院の教育に携わってこられました。学生・院生時代を含めると実に48年、ほぼ半世紀にわたって先生は、戦後の立教大学と経済学部の発展に尽力され、学問の府としての本学の名声を高めてこられたのでした。

先生は学部において貨幣論と金融論を担当されて多くの学生の教育にあたられ、ゼミナールにおいては323名の優秀な卒業生を社会に送り出すとともに、大学院における研究指導により、外国人留学生も含めて多くの研究者の育成に努められました。またこの間、1979年4月から1981年3月まで経済学部長、大学院経済学研究科委員長、さらに同期間および1991年4月から亡くなられるまでの間に立教大学院評議員を歴任されたのはじめ、大学院主任、学科長などの役職を通じて本学の教育・研究の充実・発展のために力を注がれました。

貨幣・信用論、金融論を中心とする先生の研究業績は、学位論文「蓄蔵貨幣の研究」に代表されるように、信用理論研究会、金融学会、経済理論学会など学会で高い評価を受け、この分野の研究の発展に大いに貢献されました。先生は多くの論文とともに単著としては5冊の著作を遺されましたが、なかでも最初の『貨幣論研究序説』は、今日なお貨幣・信用論の分野の基本文献のひとつとなっております。先生は戦後まだ十分に開拓されていなかった蓄蔵貨幣の問題から研究を始められ、その後も貨幣の問題を軸として資本主義経済の全体の構造を把握するという方向を貫かれました。資本主義経済は全面的な貨幣経済の世界でもありますから、貨幣に視点を置いた研究は経済学の重要な領域のひとつをなすものです。近年、基礎的な貨幣論抜きの金融論や金融制度論が増えているなかで、そうした傾向に対する批判意識をもって、先生は特に晩年の10数年を、現在の金融改革や変転激しい金融制度の問題の解明に精力的に取り組まれました。残念ながらその歩みは先生の急逝によって半ばとなりましたが、その成果の一端は、銀行制度の本質論から最新の金融制度論の両面を詳述した『金融の基礎論』として纏められています。

先生は経済学の研究と教育に力を尽くされただけでなく、大学スポーツの分野でもその発展

に努力されました。ご自身の学生時代の現役選手としての経験を活かして、長らく本学の準硬式野球部長を歴任され、また1991年4月からは東京六大学軟式野球連盟の会長を勤められました。また立教大学だけでなく、広く日本の私立大学の発展にも尽力され、1977年以来、財団法人大学基準協会の基準委員あるいは判定委員、研究委員として活躍されました。

このように、先生は広範な分野で経済学研究と大学教育の発展のために多大な貢献をされてきました。しかし、先生が何よりも立教大学を愛し、経済学部発展のために全力を尽くされたことを私たちは忘れることはできません。

経済学部は先生の人と業績を偲んで、本年（1993年）4月24日にチャペルにおける学部葬で先生をお送りしました。加えて、ここに先生のご功績を永くとどめ、心からの哀悼と感謝の念を表すために本誌を先生の追悼号といたします。

先生、どうか安らかに眠りください。

1993年11月

経済学部長 大 橋 英 五